

基礎研 レター

介護経験の有無別にみた 自分の介護のための準備状況

保険研究部 研究員 村松 容子
e-mail: yoko@nli-research.co.jp

1—はじめに

高齢期において、「自分自身の介護」は不安事項の1つだ。生命保険文化センターの「平成25年度生活保障に関する調査」によると、自分の介護に対する不安を持つ人の割合はおよそ9割¹となっている。しかし、ニッセイ基礎研究所が50～69歳の人を対象に実施した高齢期をテーマとするアンケート調査²において、老後の生活設計を行う上で考慮に入れたことを尋ねた結果、「自身の介護」を考慮に入れた割合は、「健康維持・管理」、「生きがい・過ごし方」、「収入・支出」、「資産・負債」、「住まい」を考慮に入れた割合と比べて低かった（図表2参照）。69歳までの人にとって、自分自身の介護は、やや遠い話のようだ。この結果を、これまでに介護経験がある人と介護経験がない人で比較すると、介護経験がある人は、「自身の介護」を含めて多くの項目を老後の生活設計を行う上で考慮に入れている。

そこで、現在の生活設計状態や介護についての準備状況を介護経験の有無による差に注目して分析をした。

2—自分自身の介護についての準備状況

1 | 「自分自身の介護」について、介護経験がない人はあまり考えていない

まず、「老後の生活設計」を行っているのは、介護経験がある人では、「具体的に立てている」が5.1%、「漠然と考えている」が53.0%、「特にしていない」が42.0%となっている。一方、介護経験がない人では、それぞれ2.3%、40.6%、57.1%となっている。「生活設計をしている人（「具体的に立てている」と「漠然と考えている」の合計とする。）」は、介護経験がある人が58.0%であるのに対し、介

¹ 生命保険文化センターの「平成25年度生活保障に関する調査」によると、自分の介護に対して不安感がある割合は男女とも30歳代以上でおよそ9割を超える。そのうち、「非常に不安を感じる」の割合は、50～60歳代男性で30%、女性で40%を超える。

² 2014年6～7月実施した調査で、対象は全国の50～69歳の男女個人。サンプル数は、介護経験ありが2047サンプル、介護経験なしが1005サンプル。

介護経験がない人は42.9%と、およそ15ポイントの差があり、介護経験の有無によって、老後の生活設計実施割合は大きく異なる（図表1上）。

性別、年代別に詳しくみると、介護経験の有無によらず、女性は男性と比べて、60～69歳は50～59歳と比べて、それぞれ生活設計をしている割合が高い（図表1下）。

つづいて「生活設計をしている人」を対象に、生活設計をする際に考慮した項目を尋ねた³結果、すべての項目において介護経験がある人はない人と比べて考慮に入れた割合が高くなっている（図表2上）。特に、「ご自身の介護」に関しては、介護経験がある人の29.1%に対して介護経験がない人では16.2%と、10ポイント以上の差がある。

性別、年代別に、介護経験の有無による老後の生活設計で考慮に入れる項目の差をみると、「健康維持・管理」、「生きがい・過ごし方」、「収入・支出」等の老後の生活設計を行う上で考慮した項目として上位にあがったものでは差が小さいが、「資産・負債」、「住まい」、「ご自身の介護」等の下位のものでは差が大きい（図表2下）。

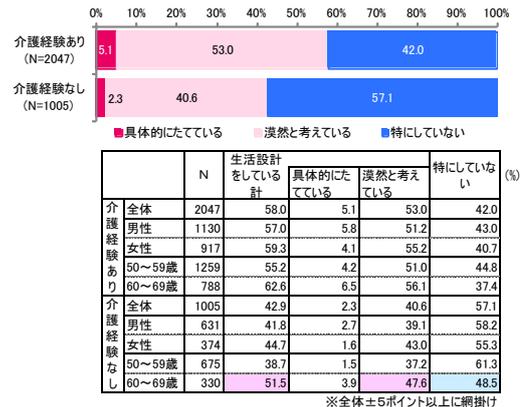
2 | 介護経験がない人は、自分の介護の準備として「何をしたいかわからない」

介護経験がない人は、老後の生活設計を行っている割合も、老後の生活設計をする際に自分自身の介護を考慮に入れる割合も、介護経験がある人と比べて低いことから、自分自身が介護が必要となった時の準備を行っている割合も、介護経験がない人は低い（図表略）。

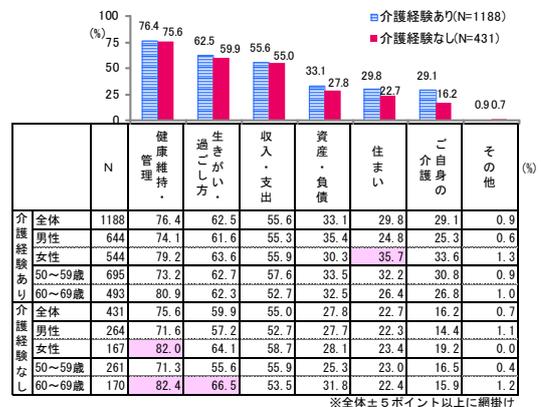
そのため、自分自身の介護に対する準備をしていない人を対象に、今後の準備意向を尋ねると、やはり介護経験がある人が、介護経験がない人と比べてすべての項目で準備意向が高い（図表3上）。

介護経験の有無それぞれについて性別、年代別に今後、準備する意向をもつ項目をみると、「公的介護保険制度に関する知識習得」、「介護費用に関する情報収集」、「公的介護保険制度以外の自治体等の支援サービスに関する情報収集」等の情報収集については、介護経験がない人でも、女性と60～69歳を中心に高い（図表3下）。しかし、「介護費用の蓄え」、「希望する介護の方法や場所についての家族・親族への依頼」、「介護施設に関する情報収集」については、介護経験の有無によって差があり、介護経験がある人で高くなっている。

図表1 老後の生活設計の有無



図表2 老後の生活設計の項目



³ 「その他」を含む6項目をあげて考慮に入れた項目を複数回答で尋ねた。

さらに、今後も自分自身の介護のための準備をする予定はない人に対して、その理由を尋ねると、「まだ若いから」、「自分に介護が必要になるとは思わないから」、「公的介護保険制度で十分と思っているから」といった準備を不要とする考え方は少ないほか、介護経験の有無による差は小さく、介護経験の有無によらず、いずれ準備が必要と考えているようだ（図表4）。

しかし、介護経験がある人では、経済的、精神的、時間的に「余裕がないから」が上位にあがったのに対し、介護経験がない人では「何をしたいかわからないから」、「きっかけがないから」、「興味がない・関心がないから」が介護経験がある人に比べて高くなっている。特に「何をしたいかわからないから」は、介護経験がない人の理由として最も高い。

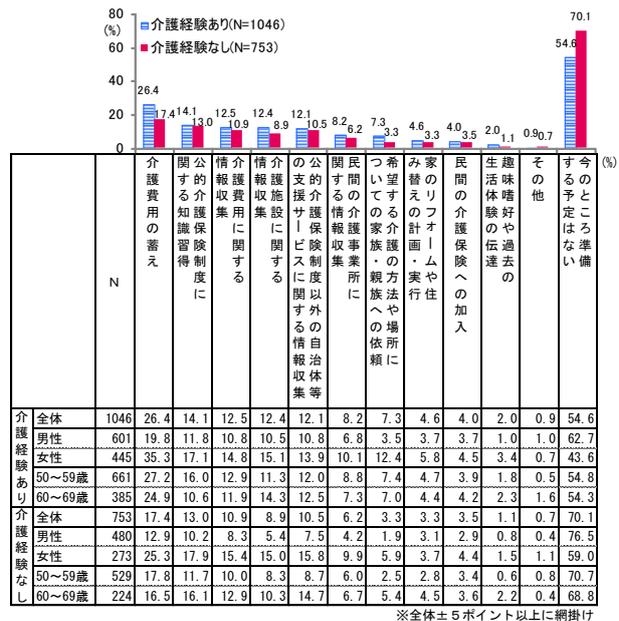
3—まとめ

以上より、介護経験がある人は、老後の生活設計を行っている割合が高く、自分自身が介護を必要とする状態になった場合の準備を行っている割合が高かった。介護経験があっても、自分自身の介護のための準備をする意向がない人もいたが、その理由は現在の生活において、準備するための経済的、精神的、時間的な余裕がないことによるようだ。

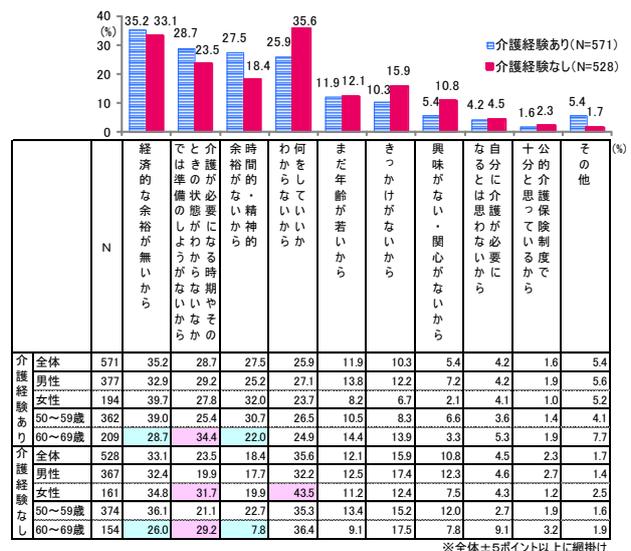
一方、介護経験がない人は、老後の生活設計をしている人が少なかったほか、老後の生活設計をしている人でも自分自身の介護についてはあまり考慮していなかった。今後も自分自身の介護のための準備をする意向がない理由は、介護のための準備を不要と考えているわけではなく、「何をしたいかわからない」や「きっかけがない」ことによるようだ。

今後の準備については、介護経験がない人でも、女性と60～69歳では、公的介護保険制度に関する情報や、介護費用についての情報などの情報収集をする意向が、介護経験がある人と同様に高かった。しかし、介護経験がある人は、情報収集のほか、介護費用の蓄えや希望する介護の方法や場所についての家族・親族への依頼を行う意向も高かった。

図表3 今後の介護準備の予定



図表4 準備をしない理由



こういった介護経験の有無によって、自分の介護のための準備状況や今後の意向が異なるのは、介護経験がある人は身近に介護を要する高齢者がいる（いた）ことから、自分自身の介護を含めて高齢期について考える機会が多いほか、介護に必要な費用等の目処も立ちやすいのではないかと考えられる。また、50～69歳では、まだ、親世代の生活の手助けをしている人も多いと考えられ、自分自身の介護についてまで考慮が及んでいない可能性がある。特に、男性と50歳代は、老後の生活設計をしている割合が低く、自分自身の介護の準備をしている割合も低かったが、これはまだ就労中である人も多いと考えられ、自分自身の介護についてまで考慮が及んでいないと考えられる。

冒頭でも紹介したとおり、現在、9割の人が自分の介護に対する不安を持っているにもかかわらず、実際に準備を行っている人は一部にとどまっている。自分の介護のための準備を行える期間が健康な間だけに限られていることを踏まえれば、介護が身近でない人であっても準備を進めていけるような情報提供が望まれる。